

■ 2007 年度 卒業論文要旨 ■

横浜線の掲げる看板：

J R横浜線が横浜北部に与えた影響

石田 梓

東京都江東区南砂地区における短期間内での人口増加の背景とその影響

板橋 まりえ

東京都江東区では、1997年から2007年末現在まで一貫して人口が増加している。地域毎にみると一定期間で急増するパターンが多く、これは民間分譲マンションの急増が原因である。工場の撤退による未利用地の増加は公共集合住宅だけでなく、民間のマンションの建設も増やし、江東区の歴史はその規制と緩和の繰り返しであった。近年は特に若いファミリー層と児童の人口が増加したため、区内の一部では学校等の公共施設への受入れが困難になるなどの影響が出ている。

そこでこの変化の詳細を確かめるために、1年毎の人口集計結果が得られる住民基本台帳をデータに用いて、区内の一部の地域について重点的に調査した。調査地域には、他よりも数年遅れて人口増加が始まった南砂地区の中でも急激な変化が起きている新砂3丁目を選んだ。ここでは、未利用地が広がる土地から多様な都市機能を持つ開発地域へと変貌し、大規模マンションの建設が相次いで、20人に満たなかった人口が5年間で4500人に増加するという変化が約10年間で起きている。この南砂駅周辺は、区の計画的な整備事業の結果として居住環境の質が向上した上に建築規制が緩くなっており、低価格の大規模民間分譲マンションが集中し、交通の利便性もあって若いファミリー層を中心とした転入者が集中した。その結果、付近の小学校は受入れが困難となった。また、付近の交通機関

の混雑につながっていることや、住民の構成に差がある集合住宅コミュニティが近接していることなど、小スケールでみてこそその問題点もみえてきた。

人口その他の資料を細かく分析した結果見えてきた新砂3丁目の様相は、江東区全体の人口増加の様相と共通する点が多く、小さなスケールの地域内において短期間で急激に起きた変化の集合の結果が、江東区全体での変化であることを確認した。区は高齢者が増加することは予測していたが、一定期間に児童人口が増加することは予測できなかったと考えられる。その予測できなかった事態の発端が、区による開発であった。

東京における高級住宅地の形成と変容：

田園調布、成城、常盤台を事例に

上菌 栄衣美

(本誌 pp.98 ~ 109 にフルペーパーとして掲載した。)

地域学で再構築される地域イメージ：

「会津学」の活動を事例として

久島 桃代

近年全国各地で、地域学・地元学と呼ばれる活動が盛んである。住民達が地域についての理解を深めていくことが地域学・地元学とされる。そしてこれらの活動の報告書を読むと、どの活動でも住民達が自分たちの地域に注目した結果、活動以前とは違ったイメージをもって地域を捉えていくようになっていることが分かる。

ならば従来「後進的」・「貧しい」または「異境」といったイメージをもって語られることの多かった東北地方において、地域学はどのような役割を果たしているのだろうか。この問を追究するため、本研究では福島県会津地域を中心に活動を行っている地域学「会津学」